

現代の日本人が、「何を求めているのか」 「どんな佇まいの中でくつろげるのか」をまちづくりの柱にした

新明館・後藤哲也社長の語る“黒川温泉繁盛物語”

糸乗 貞喜

(よかネットNO.49 2001.1)

- 1 観光・サービス産業

黒川温泉の評判がいいのに、その理由が分からず、私は変に思っていた

十年ほど前から、黒川温泉の評判が否応なく耳に入ってきていた。「温泉にでも行こうか」というと、以前なら湯布院を薦めていた人も「黒川温泉がいい」と薦める。顧客アンケートでも、湯布院なんか目じゃあないということで、ダントツで黒川温泉がいいらしい。理由を聞くと「露天風呂がいい」、「露天風呂巡りの手形の仕組みがいいんだ」という。しかし、どうも納得がいかない。私は、この事務所の中で「露天風呂なんてゴマンとあるじゃないか」「手形さえやりゃあ温泉が流行るのか、それもあちこちあるじゃあないか」と悪態をついていた。もう一つ変なことがあった。湯布院だと「湯布院の」と必ず旅館名がつく。ところが、こちらでは「黒川温泉」という地名で評判が語られていることであった。しかし、流行っているのは事実らしい。自分で行って確かめてみるしかない。

地名で語られるということは、「まち」として評価されているに違いないと思った。「どこに泊まればいいんだ」と事務所で聞いたら、「新明館が有名ですよ」と言ってくれたので、予約を入れた。あとで聞いてみると、新明館はいつも予約で



大きな手の後藤哲也社長

一杯なので、泊まれたのは随分幸運だったらしい。「どこで話を聞けばいいのかな、役場の企画の人でも知らないか」とたずねても、「日田のKさんにでも聞いたらどうですか」という程度しか返事がこない。そこで、KさんにTELを入れた。Kさんは「新明館の社長に聞きゃあええ」という。「役場の人を紹介してくれないの」と聞くと「後藤社長に聞くのが一番だ、いつ行く、連絡たのんどく」ということで電話は切れた。そのあとで確かめる電話を入れたら「小国町のH町議にたのんどいた」という返事であった。「Kさん、行きたいのは南小国町の黒川温泉なんやで」「いやあの辺は、同じ町みたいなもんや」。どうも要領をえないが、近くのU町で話をするのが仕事で、そのついでに回ってみるのだからいいや、と思って出かけた。

京都には20年通いました。京都は日本人の心の移り変わりが分かる街です。20年前までは京都の庭園、泉水、茶室などに人がいっぱい訪れていたが、今では人々は作り物ではない自然を求めています

後藤社長との初対面の話がこれだった。新明館の玄関に入った椅子式の囲炉裏で、まず私の自己紹介をした。京都に住んで関西で仕事をしてきたこと、城崎温泉の計画(客を旅館内にとじ込めないで、外湯や商店街を重視した、街に出歩く魅力づくりをした)に係わったこと、湯村温泉では湯船がたくさんある露天風呂の計画をしたこと(町設3セク経営)などを話し、私が温泉に興味をもっていることを説明した。それに対する話が上記である。

「なぜまた京都なんですか」

「京都にはすばらしい庭がある、寺がある、街がある。日本人はみんな京都を目指した。みんなそこへ行って心の安らぎを得ようとしたんです。私も行って見て回りました。昭和30年代、40年代

には京都ブームがおこった。温泉地の旅館もみんな泉水をつくり庭を刈り込んで京都の真似をしました。それだけではなく、着飾った女将が女中や番頭を連れて座敷に挨拶にでたりしました。」

「客から金とっておきながら、『これは女将のおごりです』なんて言って銚子を配らせたりしていましたね」

「女将が光る旅館を喜ぶのは70歳代までの人です。どっちが客が分からんようなことをしていたのです。テレビもそんな宿を取り上げるもんですから。マスコミに取り上げられて、タレントが来るようになると旅館は潰れますね。客がドンドン来るもんですから、できるだけ泊めようとする。舞い上がって喜んでいるが、サービスの質はドンドン落ちる。そんなところではくつろげないので、お客様は離れていきます。無理をして質が落ちると、客は必ず離れていきます。」

しかし、20年ぐらい前から京都も変わり始めました。作りものの庭から離れ始めたのです。これからは、もっと自然のもの、花が咲き葉が落ちる雑木だなど思うようになりました。きれいな庭にも人は来るし、街も人でにぎわいますが、通過型になっています。「泊まってくつろぐ温泉地」は、やっぱり雑木です。黒川温泉はそれを目指してきたのです。」

黒川温泉って、もともとどんなところですか

「ここが観光地みたいに見られるようになったのは、ここ15年ぐらい前からです。戦前からの湯治場で、春と秋の農繁期の骨休めに農家の人が来る場所だったんです。湯がいいので来る人はいたけど、こんな山奥で海の魚を出したりしていたんです。」

「紫色のマグロの刺身がでてきたりするとゲンナリしますね」

それをやっていたんです。街は汚かったし、川はゴミ捨て場になっていました。町の人も農家の

人も、ゴミを持ってきて、橋の上から放り投げていた時代もありました。旅館も中を飾ることはあっても、街のことは誰も考えなかったのです。

そこで、後藤さんは何をしてこられたのですか。洞窟風呂を掘ったのはどういう意味ですか。手間もかかるし、身体もしんどいし、効果も分からんし。

<ひとこと>この質問には私のこだわりがあった。昨夜と今朝、洞窟風呂に入ったとき、1メートルぐらいの板に描かれた看板を見ていた。それは「洞窟風呂を掘った男 - 新明館には日本にもめずらしい洞窟風呂がありますが.....それにはちょっとやそつとでは語れない物語があるのです。ここの主人であるテツヤはある日突然、ノミとカナヅチで裏庭の石山を掘りはじめました。コツコツコツ.....毎日毎日、彼は「お客様に喜んでもらおう」とただひたすらにがんばりました。三年後、洞窟風呂は彼の大きな手と温かい気持ちでやっと完成しました。そのテツヤがこの辺りにきつといます。今日は植木をいじっているかもしれません。大きな鼻と大きな耳。つぶらな目もとに幅広い唇。とても旅館の主人とは思えない風ぼうのテツヤをさがしてみてください」と描かれている(写真参照)。私は少しひねくれているので「こんな看板出したいぐらいなら、掘らんでええやないか」と思ったりしていたが、後藤社長の手をみて、こだわりは全て消えた。いい手だった。もちろん、鼻も耳も、目も唇も見た。30分か1時間という約束で始まった話は、街中を移動しながら、4時間以上になった。

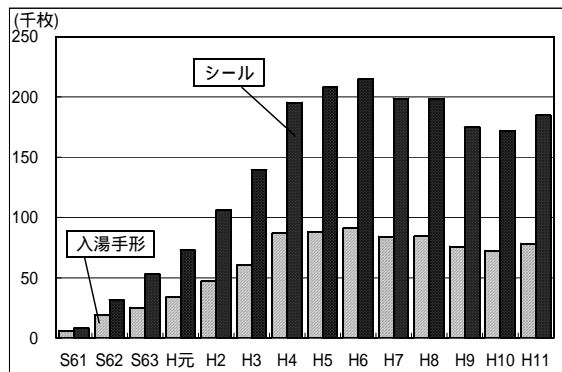
「実は、私は三代目です。親父は今も90才をすぎて元気なんですけど、軍人上がりで頑固でいっさい変えようとしません。母親は先生の子に生まれたので、料理は上手ではなかった。お客さんからも、



洞窟風呂をつくった男の看板

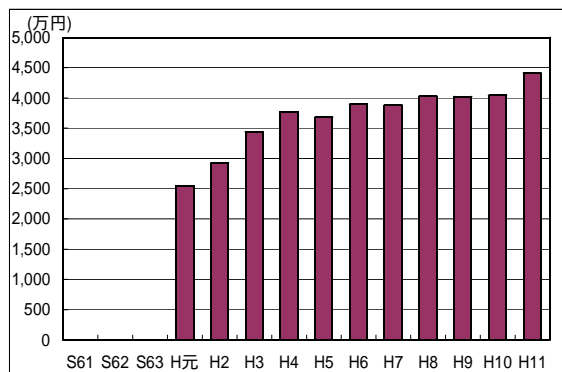


昭和38年にできた黒川温泉の露天風呂



黒川温泉観光旅館協同組合資料

図表1 入湯手形・シール数の推移



黒川温泉観光旅館協同組合資料

図表2 入湯税売上の推移

料理の苦情がでたりしても、親父は一切無視でした。私は、何か客の喜ぶものをつくらないと、三代目の私が新明館をつぶすことになると思ったのです。私の原動力は、親父とのアツレキです。親父は金を一切出してくれません。金がなくてもできる、客のくつろぐものは何かと考えて岩を掘っていったんです。客に喜びを贈らないと、とアセリでいっぱいでした。それは22~23才の頃です。身体も丈夫だったんです。三年後には、入れるように形もできていました(後藤さんは68才なので、22~23才は昭和30年頃である)。」

「洞者風呂の奥の、露天風呂ができたのはいつ頃ですか」

「昭和38年頃ですか。うちは、川と崖に挟まれた狭いところですから、お客の心をなごませると言っても木を植えるわけには行かないので、岩の間にツツジを植えたりしました。風呂をよくする以外のほかに競争に勝てるものはなかったのですから。そのおかげで、新明館は30年頃からいつもお客様がたえませんでした。」

「黒川温泉の露天風呂は、いつ頃できて来たのですか」

「昭和50年頃から60年にかけて、十数カ所できていたと思います。露天風呂といっても単に天井がないだけでは、客はくつろぎません。周囲も含めて全体が形になって客にサービスを提供しないと、くつろげません。そのため、まちづくりに取りかかっていったのです。」

入湯手形というのが有名ですが、どんな経緯(いきさつ)ですか

「それにはまず温泉観光旅館組合の話をせねばなりません。」

「組合には随分人がいますね」

「常勤が5人います。日本一の組合ですよ。といっても、組合の体をなしたのは15~16年前からです。それまでは借金のための組合で、金を借り



木立の足下は苔になっていた



元は田んぼだったが、半年ほど前に雑木を植えた。
足下にはクマザサ。

るたびに理事長の印をもらわねばならなかったのです（いわゆる事業協同組合のこと）。

バブルの少し前頃（昭和60年頃）ですが、黒川温泉も代わりが始まっていて、私も組合の執行部に入ったのです。

それまで黒川温泉は客がきていなかったのですが、新明館にはずっと来ていたのです。それで私はハタケラレテ（端に除けられる、ということか。要するに皆に恨まれ、誰も言うことを聞かなかった）いたんです。やっと、街全体を客に喜ばれる街にする事業が始まりました。」

<ひとこと> 旅館組合の事務所に行って資料をもらった。その中に『視察資料』というのがある、組合の「設立よりの経緯」がでているが、「S36・組合設立」以降61年まで記述がない。61年には、「組合組織編成、植樹事業開始、入湯手形発行開始、共同パンフレット発行開始、日曜朝市開始、黒川温泉観光セミナー」と、矢継ぎ早な仕事ぶりが伺える。そして「年間総事業費、16,457千円」となっている。若手執行部が満を持して走り出している様子が伺える。62年には「個人看板撤去・共同看板設置、旅館用下駄統一、すずめ地獄開発」とあり、事業費も30,308千円と倍増している。最近の総事業費はおよそ150百万円になっている

「最初の事業費はどう工面したのですか、皆に嫌われていても、共同歩調がとれたのですか」

「県の補助金です。それで“緑倍増計画”を始めました。旅館が一軒だけでやっても、人々は評価しません。街が変わらないといけないと思いました。嫌われ者でしたから、そんな声も聞こえてきましたが、3年間力一杯やりました。お客さんは、こしらえものの庭木は見に来ないで、自然の雑木のある庭を見に来ました。お客さんがそうい

年度	主な事業	年間総事業費(千円)	
S36年	組合設立	16,457	
S61年	組合組織編成 植樹事業開始 入湯手形発行開始 共同パンフレット発行開始 日曜朝市開始 黒川温泉観光セミナー		
S62年	個人看板撤去・共同看板設置 旅館用下駄統一 すずめ地獄開発		30,309
S63年	観光地づくりシンポジウム開催 宿泊ギフト券発行開始		45,554
H1年	黒川温泉ウォッチング&プロポーズ		54,242
H2年	歴史街道推進	65,720	
H3年	芝張り・巣箱設置	74,422	
H4年	ふるさと環境会議参加	105,479	
H5年	組合事務所落成 よもぎ石鹸導入	120,646	
H6年	黒川イメージテレビCM放映	136,462	
H7年	童謡祭 ギターアンサンブルコンサート モニター宿泊懇談会 従業員表彰式	150,907	
H8年	童謡祭、熊大フィルハーモニーコンサート 従業員表彰式 レクリエーション大会 人材確保推進事業 従業員接客接遇電話対応セミナー	155,951	
H9年	入浴マナーポスター作成 観光地従業員研修	147,188	
H10年	露天風呂の日(感謝を込めて) 従業員実演研修・観光地視察 従業員表彰式 経営者・従業員アンケート調査 ホタル育成着手	149,101	

図表3 主な事業経緯

う評価をしたのです。「まちづくりはお客様の評価で決まる」と思いました。温泉手形をやって収入があるようになると、県は補助金をくれなくなったので、今は自前でやっています（手形シールを出すと、どの宿の露天風呂にも入れるので、露天風呂のない旅館に対する互助的意味も持っていた）。」

「客が評価すると言っても、2～3年で評価されるほど、そんなにすぐに雑木が育ったり、庭の雰囲気ができたりするのですか？」

「私は雑木を植える技術を持っているのです。木は昔からあった形で植えんといかん。技術というのは、そういうことを計算して植えているということです。また雑木は一本植えはダメです。少なくとも同じ木を3本ぐらい植えないと育ちにくい。自然にあったように植えないと、人々が歩いて眺めても不自然です。この辺りにある木を、自然にあるように植えると、2～3ヶ月で林や木立のように育ちますよ。」

<ひとこと>先に述べたように、このインタビューは4時間以上にも及んだ。私のあとの予定でやめることになったが、後藤さんが植えられた木立を見るために、クルマで「山河」と「山みずき」に移動しながら、「雑木を植える技術」について、実物を前にして聞いた。木立も小川も、数ヶ月しか経っていないのに、何年も前からあったかのような佇まいになっていた。また、「山河」では木立の下は苔になっていたが、「山みずき」ではクマザサになっていた。「クマザサの方が、ここでは自然に近い」ということなのだ。

黒川に来ていただいている間中、お客様にくつろいでいただくためには、宿だけでなく、黒川温泉の街全体、周囲の自然を含めて「くつろげる」場になっていなければならないと思っています。

いろいろ話を聞いたが、雑木の植え方について「木と話しきる」という言葉がでたのには参ってしまった。まちづくりは、結局のところ地域経営である。

「日本人は「くつろぎ」を求めている。昔は身体を使って働いたが、今は頭を使ってストレスをためています。だから雑木を求めるのです。今後もずっと続くでしょう。温泉も観光地も街も、一層“くつろぎ”が求められるでしょう。」

長いインタビューだったが楽しかった。書けないことがたくさん残ったが、後藤さんは終わりに「人が喜んでくれる街にして、人が評価してくれる街で死にたい」といった。

追記：その後、後藤さんとは何度もお会いしている。協同組合 地域づくり九州が黒川温泉で行った「地域づくり現地セミナー」は、後藤さんの話がお目当てだった。今年は「観光地計画」の現地視察として学生を連れて行き、後藤さんに話していただいた。さすがに年輪と現場の実行力を通じた話だったので、学生諸君は私の講義より熱心に聞いていた。

(2004.5 いと)